国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校

共同研究者 松本 宜明（高等部）
家近 早苗（東京福祉大学）
餅木 哲郎（堺市立平岡小学校）

特別支援学校高等部における教育課程検討を支える「学び合いの場」の実践

－協議と個別の振り返りを組み合わせた協議プロセスの記述－

［研究背景］特別支援学校高等部の教育課程検討を、担当者だけの仕事にせず「教員集団の営み」として立ち上げることを課題とした。

［研究目的］協議の場「学び合いの場」と、協議後の「個別の振り返り」に着目し、協議プロセスを記述しながらその機能を検討した。

本研究は令和5年・令和６年に本校において行った
特別支援学校における「学び合いの場」の実践　を引き継ぐものである。

［研究方法］

１．対　象　4回分の協議記録（のべ27名参加）と、参加教員への振り返り記録（のべ20回）であり、発言を意味内容に沿って整理した。

２．内　容 2025年11～12月に「学び合いの場」を全4回実施し、終了後1週間以内に半構造化面接による「個別の振り返り」を行った。

報告者がコーディネーターとなって、「学び合いの場」を進行する

［結果］

回	共通資料	焦点	主な論点	進んだこと
第１回	Qコース ツリー表	俯瞰	国語・数学、キャリア、体育、自立活動の位置づけ	「Qだけでなく３コース比較が必要」を共有
第２回	３コース ツリー表	具体化	学習の編成（固定／班）、実施条件（人・設備等）	比較で論点を具体化し、次回以降の材料を蓄積
第３回	３コース 時数表	具体→実施	増減・統合、教科横断、外国語・コミュニケーション、清掃、自立活動の配分	時数の組替え候補を可視化して検討
第４回	改善案資料 案1/案2	実施	国語・数学、道徳、家庭科、清掃、芸術・体育選択制	「来年度実施」vs「継続検討」を区分する手続き形成

［考　察］

①協議プロセスの要点

共通資料を活用して論点を可視化・区分することで、協議を「俯瞰」から「具体的実施」へと進め、合意形成に向けた筋道を立てやすくする過程が確認された。

②個別の振り返りが協議参加を支える機能

個別の振り返りは、①気づきの外化、②論点の保持と俯瞰、③次回への見通しの形成という3つの機能を持つことが考えられる
。これらの機能は、参加者が協議の内容を当事者として捉える契機となり、個人の理解を次回の協議へとつなぐ「協働を支える中間過程」として重要な役割を果たすと考えられる。

③現場接続と当事者性の観点からの示唆

教育課程の検討が「決めて終わり」になり、現場の実践に繋がらない事態を防ぐには、教員の個業化を解消し、協働の枠組みや役割を明確にすることが重要である。具体的には、共通資料を用いた論点の可視化と個別の振り返りを組み合わせることで、議論を場当たり的なものにせず、次年度の実装を見据えて整理することが重要である。